特 別 講 演

癒しの原理

大阪大学名誉教授：中川米造

Principles of Healing

Yonezoh NAKAGAWA

Bukkyo University

医療人類学では、それぞれの民族に固有の医療ではないものをコスモポリタン医療とよぶことがある。無国籍医療ということであるが、それは現在世界のどこにおいても標準的な医療となっている。しかし世界の医療史からすれば、これも19世紀ヨーロッパに登場した一つのローカルな医療の形式にすぎない。ただし、19世紀ヨーロッパは世界支配の思想をもっていた。宗教を否定し、神に代わって自然を支配しようとし(ニーチェは「神は死んだ」と喝破した)列強は支配するための植民地をできるだけ拡大し、相互にも覇権を争った時代である。市場制覇、資本制覇、工業化の促進が大きく要請された時代である。

科学はここにはじめて時代の要請にこたえるものとなるが、それは科学という字が示すように(その原語 scienceも同じ)分けることによって要素を抽出、同定することによって、自然より一層強力に、しかも普遍的に事象を創りだすことができるからである。

医療もまずは解剖学的な実体を求めることで、病人から病気を切り離し、さらにそれを臓器、組織、細胞へと視野を縮小することでいっそう病気への支配力を強めようとしてきた。近年はさらに分子レベルに、より普遍的な病気の実体をもとめる傾向が強くなった。そうした認識は、病人から病気を切り分ける段階において、人間的な側面を捨てることによって、民族性を越えた普遍性と合理性を獲得することを可能にし、コスモポリタンな医療となることにもなった。とくにその合理性と普遍性は製薬や医療機材の製造業とむすびつくことも容易になる点、これも19世紀に思想や傾向

に即したものとなった。

そのような医療が独占的に普及するにともなって、種々の問題があらわれてきたが、とくにそれが期待されたほど成果をあげないこと、とくに近代社会の原則である納得できる費用・効用関係が成立しがたいことが、コスモポリタン医療の原理への疑いとともに、伝統医療や民族医療など、いわゆる代替医療への再評価につながった。それらを含めて治療原理を検討するには、より広い概念である「癒し」から考察をすすめるのがよいであろう。

癒しは、単に病気からの解放に留まらず、渴きからの解放、苦しさからの解放、など人間的な問題にかかわっている。病気からの解放を考えても、解剖的病理的な障害からの解放や予防だけでなく、同時に存在する感情の問題もあり、社会からの隔離、生活の混乱に関わる不安や現実など、個人の生命、生活にかかわる全面的な苦痛、困難にかかわる問題への再考を促す。当然、文化や社会的な背景と密接なつながりがあるとみなければならない。しかも病気はそれを診る専門によって、一人の病者において幾つもの病気を同定することができ、しかもそれらの治療において重複や拮抗をおこし、時に重大な結果を招くこともある。癒しという立場からすれば苦痛、苦悩は一個の個人に関わることであり、対応も個的な存在から離れることはない。しかも、コスモポリタン医療のように身体内の実体として病気をとらえるのではなく、一個の存在として、自然的及び社会的環境との間のギャップを苦痛困難と感じる状態である。それは実体であるよりは、むしろ信号であると捉

えるべきであろう。コスモポリタン医療では、それは機能的疾患として、二義的にあつかわれ、対症療法で糊塗されるにすぎないが、実際にはそれは医療機関を訪れる患者の大きな部分を占め、しかも適切な対応ができない。なによりもコスモポリタン医療の従事者が関心をもたないことが、さらに症状からの解放を妨げている。

癒しの基本になるのは、手当てと温かさである。それは胎内における、あるいは生後しばらくの間に、母親との密着した接触のもと、生きるためのニーズがただちに満たされる原初的信頼体験をつくるものである。成長後もこの原体験に回帰する状況は、苦悩、苦痛を体験する場合に、それにこだわり、身体的にも身構え、こわばった状況を寛解させることで、全体性を回復する基本的条件となるのである。自然治癒力といわれているのはこのようなことをいうのであろう。

したがってほとんどすべての文化において、手当てやあたたかさに直接由来する治療法がみられる。按摩やマッサージ、指圧、温あん法、入浴などもその系列のものである。鍼は手当ての場所を極小にしばった方法といえないこともなかろう。また灸も高温ではあるが、鍼同様に極小部位において全身への影響させる方法であろう。さらにいえば、医療者の病者への態度やコミュニケーションにおいても、親しさ(身近さ、病者の側に立つ)あたたかさが有効に働くことも思いおこしておくのがよいであろう。

こうした全体的な癒しにおいては、解剖学的あるいは要素還元主義的な疾病観にもとづく技法のように、収斂的に病気の原因を同定し、直接その部位あるいはその要素にたいして働きかけることができない。むしろ拡散的になり、漠然とする傾向はあるが、全体としての調和やバランスという概念を基礎にすることによって、技法を導くことができる。それは、単一の要素を原因とするのではなく、すくなくとも相反する二つの性質(中国の思想における陰陽)、あるいは3つの性質(アールペーダにおけるピッタ、カーバ、バーユ)、四つ(ギリシャ医学における血液、粘液、胆汁、黒胆汁)、最大で5つ(中国の五行)などが同時に存在しながら、いずれかが優位あるいは劣位になる

ことが調和やバランスの失調であると理解し、それを回復するとが癒しであるとする。この場合、それぞれの相は要素ではなくて、自然や生理全体の局面を象徴的に表現したものである。この象徴はとくに情動的な状況を表現するためには有効であり、病者にとって重大な情動的な困難に対しては、直接的に影響する。

また、癒しの原理においては、対応あるいは感応(correspondence)という考え方が重要である。要素や部分が直接原因となるという考えはとらない。部分はそれぞれ独立しており、他の部位からの支配はうけない。それぞれが他の部位と同調すると考えるのである。(ライプニッツの单子論では“単子は窓がない”という)。鍼灸では、皮膚に内部臓器の状態に対応あるいは感応する部位をもつという。(経穴)これは解剖学的に理解するよりは対応、感応としてとらえるべきであろう。